

[た よ り]

青森県支部だより

鈴木唯司

1 はじめに

青森県透析医会は、青森人工透析研究会として1978年（昭和53年）3月19日に発足しました。この日、青森県医師会館ホールで第1回研究会が開催されました。弘前大学附属病院、鷹揚郷腎研究所、村上新町病院、青森県立中央病院、青森労災病院、川嶋病院などの透析施設より症例の発表、質疑があり、さらに東京女子医科大学の太田和夫教授の特別講演「欧米における腎センターの現況」が行われました。

その後研究会は数回開催されましたが、1979年（昭和54年）には研究会の会則、会員名簿が作成され、体制を整えてゆきました。1981年（昭和56年）日本透析医会が設立されたのを機に、青森県支部として青森県透析医会と名乗ることになり、正式に世話人（幹事）会を作り、世話人会の推挙で会長を決めることにしました。さらに年1回青森人工透析研究会を開催し、会誌を発行することとなりました。以後青森県全体より会員が増加し続け現在に至っています。

2 青森県透析医会の構成

この会は純粋に透析療法の向上発展を目的に、青森県在住の透析医療に関係する医師からなる会ですが、会員としては施設会員で構成されており、参加施設に所属する医師がすべて含まれることとなります。参加施設（会員）は2007年（平成19年）6月現在35施設となっています。なお会は会長（任期2年、再任可）、と理事（および監事）により運営されており、その内

容は総会で報告されています。

3 青森県透析医会の活動

1) 青森人工透析研究会

前述のごとく、本会の学術大会として青森人工透析研究会が年1回開催されています。研究会では医師による症例、臨床研究の発表に加え、看護師、検査技師、栄養士、理学療法士、ケースワーカー等から多彩な報告があり、加えて教育講演や特別講演も行われ、最近では400人を超える参加者を得ています。2006年（平成18年）6月4日には記念すべき第30回研究会が弘前市において開催され（会長：舟生富寿鷹揚郷理事長）、一般演題に加え記念講演、特別講演、教育講演等が行われ盛会でありました。

2) 会誌「青森人工透析研究会」の発行

研究会発表演題の抄録を中心に、年間の透析医会の活動を含む庶務報告、会計報告、会員の動向を記載して年1回発行されています。一層の内容の充実が期待されるところです。

3) 青森県臓器移植推進講演会の共催

毎年の臓器移植推進月間に合わせて青森市で例年開催される「青森県臓器移植推進講演会」を（財）弘前大学アイバンク、（財）鷹揚郷青森県腎臓バンクと共催しています。

青森県ではこれまで年間6例前後の腎移植が行われ、献腎も僅かではありますが提供されていました。しか

し、この数年間は腎移植は停滞し、やっと昨年より少しずつ生体腎移植が再開されています。しかしこの5年間、献腎は途絶えたままであり、県全体としても献腎の動きが鈍いのが実情です。青森県透析医会としてもこの現状を打破すべく、臓器移植推進に協力してはいますが、腎の提供に関しては提供施設への働きかけを含め一層の努力が必要と考えられます。

4) 今後の課題

青森県透析医会として今後イニシアチブをとってゆかねばならぬ課題が幾つかあります。

最近の新潟中越沖地震は記憶に新しいところですが、日本海沿岸では数年に一回は大きな地震が起こり、被害をもたらしています。神戸の大地震や平成16年新潟中越地震を教訓に、災害時の透析について各地で対策が講じられていると聞きます。青森県付近でも（北海道、秋田県沖を含め）古くから地震による被害があり、最近では1983年日本海中部地震、平成6年三陸はるか沖地震以来大きな地震は起きていませんが、常

に起きる可能性を秘めています。その意味でも地震等の災害に対する対策を準備しておく必要があると思われませんが、残念ながらこれまでされていません。会員の協力を得て災害時の透析体制をどうするか考えておく必要があります。

昨年の診療報酬の改定は各透析施設に深刻な影響を与えました。特に地方地域間の格差は大きく、患者の少ない施設は淘汰される可能性があります。しかし青森県のような雪国では、特に冬季、地元での透析が患者さんにとって切実な要望です。このためにも地方からの要望が直接検討され、達成されるよう透析医会が力を持つ必要があるでしょう。

青森県は東西に広く、交通の便も悪く、会員、施設同士の交流が十分ではありません。そのため透析医会としてももう少し活動を広げ、お互いの交流を深くする必要があります。医師だけでなくパラメディカルの人々のための勉強会を主催するなどを考えるべきかもしれません。今後さらに会員間の交流を深め、一層実力の伴った透析医会に発展させたいものです。